

女性運動の成果をすべての人に — 男女共同参画週間に寄せて

ほった みどり
堀田 碧

たぶんどの国でもそうだが、女性運動の担い手は、都市部に暮らす比較的裕福で高学歴の女性たちが多く、ふり返ってみれば、日本でもこの間、女性運動の立役者となってきたのは、女性の学者や大学生、行政機関や専門職の女性たち、また高学歴の専業主婦たちだった。さらに言えば、そのほとんどは「日本人」で「異性愛者」で身体的「障害」のない女性たちだった。

それには理由がある。そうした女性たちは社会的に「恵まれた層」に属しているの、差別されたり排除されたりする体験が比較的少なく、「女性」というただ一点で差別されて悔しい思いをし、「女性であるが故の差別」に気づく機会が多いからである。「恵まれた」女性たちはそうやって、「女性問題」に気づき「女性運動」の先頭に立つ。やがて遅ればせながら社会が性差別を問題視し始め、差別をなくそうとしたり公的な分野に女性を迎え入れたりし始めると、まず主張を聞き入れられたり参加を認められたりするの、そうした女性たちである。

比較的恵まれた女性たちがまず性差別への疑問を声に出すこと、そしてその声を聞いてもらえること、それ自体は悪いことではない。問題はその後にある。恵まれた女性たちが、政治的・経済的・文化的な「力」を手にした後にどうふるまうか、なのだ。

男女雇用機会均等法から20年余、男女共同参画社会基本法から8年。女性たちは不十分ではあっても手にした力を、今こそ「すべての女性」のために使うべきで、多くの「恵まれない」女性たち、また男性たちのために役立てるべきだ。「みんなが生きやすい社会」をめざす女性運動の真価が問われるのは、正にこれからである。

■プロフィール 東京生まれ。フェミニズム活動家。著述家。翻訳家。大学非常勤講師。イギリスでの女性学と異文化体験を基に、女性運動やアイデンティティ、黒人女性や第三世界女性のフェミニズムをめぐる発言をしている。主な著書に『経済のグローバリゼーションとジェンダー』（共著 明石書店）、訳書に『フェミニズムはみんなのもの』『とびこえよ、その困いを』（いずれもベル・フックス著、新水社）など。